

先人の知恵から

8

かうんせりんぐるうむ かかし

河岸 由里子

日本には本当に多くの諺がある。一般的なものもそうでないものも。一つ一つの言葉に歴史があり、多くの人々の、先人の経験が編みこまれている。

ずっと大事にされてきた言葉。これからも大事に出来たらよいと思う。

今回はう行から次の七つ。

- 有為^{うゐてんべん}轉變の世の習い
- 魚心^{うおごころ}あれば水心^{みずごころ}
- 魚の目に水見えず、人の目に空^{そら}見えず
- 烏谷^{うごう}の衆^{しゅう}
- 兔^{うさぎ}も七日なぶれば噛み付く
- 牛も千里、馬も千里
- 嘘^{うそ}から出た実^{まこと}

<有為轉變の世の習い>

有為とは仏教語で因縁によって生じた現世の様々な現象の事。常に激しく移り変わるのが、この世の常であるということ。

世の中、物事の変遷が早すぎてついていけないくらいである。流行りすたりの入れ替わりも激しい。今の流行もずっと続くわけではないのだが、子どもたちと話をしていると、自分が時代の流れに乗り遅れていると嘆いている子にであう。

誰かが〇〇のゲームを始めれば、拳って〇〇を始める。誰かが××を良いと言うと、猫も杓子も××を買う。そんな時代の流れに敏感なのが思春期でもあるが、乗り遅れたからと言って嘆くほどのことではない。少し待てば又変わるからそれまで待とうと伝えている。お金のある子も無い子もいるので、お金の無い子はそう簡単に次から次へと買っていくわけにはいかない。

ファッションも激しく変わりながら、戻ってくるのも面白い。今年の流行りは70年代の流行りに重なると先日ラジオで言っていた。昔筆者の母が若いころ着ていた服が、少し前の最先端のファッションになっていたのを見ると、物を取っておくとそんな良いことも起こるのだと思う。

また、保護者も中々目の前の子どもの成長に気付かず、ずっとこのままだと思いがちになる。子どもの今の状態もいずれ成長とともに変化して行く。そんな話をするときこの言葉を使う。ただ、この言葉はちょっと難しいので知らない人が多い。

一方で、何もかもが変わってしまっても思えない。時代とともに常識も変わるし、常識ほど当てにならないものも無い。それでも世の中には変わらないものもある。たとえば子どもの発達の順序は変わらないし、人が老いて行くことも変わらない。子育ての基本的なところも殆ど変わっていない。変えてもよいもの、変えてはいけないものもある。我々はきちんとその違いをわきまえてみて行くべきだろう。

英語では・・・

All worldly things are transitory.
(この世のものはすべて過ぎ去りやすい。)

<魚心あれば水心>

相手の出方次第で、こちらの対応の仕方もある。相手が良い意を示せばこちらも好意を持って対応しようということ。

対人援助の現場では、モンスターと呼ばれる人々に対応しなければならないことも

多い。何度かののしられたり怒鳴られたりしたために、その人の顔を見た途端に恐怖心から拒否感がでてしまうことがある。モンスターと呼ばれる人々は人の反応に概して敏感である。拒否感を感じ取り更に攻撃的になり、対応する人は更に恐怖を感じるという悪循環になる。そんな時にこの諺を逆説的に使う事がある。支援者側が、その人の寂しさを理解し、受け入れようとするれば、その人の心も徐々に和らいでくる。何故その人はそんなに怒りを表出しているのか？どんな人生を送ってきたのだろうか？しっかり理解して対処すれば、悪化させる事は無いと思う。勿論、暴力、脅迫や強請などに対しては警察権力の介入も必要だ。威力業務妨害など、警察が入るケースが増えてきたのも事実だが、そこまで酷くなる前に何とかできたのではないかと思う。

英語では・・・

Claw me and I will claw you.
(私を掻いてくれたら、
あなたを掻いてあげよう。)

又は

Love is the loadstone of love.
(愛は愛の磁石である。)

<魚の目に水見えず、人の目に空見えず>

あまりに身近にあるものは、そのものの存在や価値がわからないということのたとえ。魚の周囲にいつでもある水や、人間の周囲にいつもある空気が見えないという意から。

この諺は様々な所で使えると思う。親子の関係性にも言えるだろう。親の愛情は時として子に伝わり辛く、また子の親を思う気持ちも中々伝わらない。夫婦関係でも同様である。日本人は感情や思いを言葉にして伝えるのが苦手なところがある。お互いに大切に思っているのにすれ違いが続いた結果残念なことに離婚になるケースも見てきた。ちょっとした一言が足りなかったためにぎくしゃくしてしまうのだ。それは、きっと「ありがとう」とか「お疲れさま」と言ったごく当たり前の言葉で、他の場面では簡単に出てくる言葉なのだと思う。空気のように常にそこにいる人に対しても同様で、気遣いが無くなってしまう。そんなことが、熟年離婚が多い理由の一つにもなっているのではないかと思う。

また、この諺は環境にも使えると思う。空気のように、常にそこに有るものを人はあまり意識しない。水や電気、ガスなども同様であろう。蛇口をひねれば水が出るのは当たり前、夜になれば電気が付くし、シャワー、暖房、そして冷房。恵まれた文化的な生活もその一つ。我々はこうした物のありがたみを意識せず、享受している。一方で、貧困家庭においては、電気やガスを止められ、水も止められたりしている。寒い冬は毛布や布団にくるまり、ろうそくに灯をともし、カセットコンロを使って生活している。そんな家族に何回も出会った。

電気もガスも無く、水道も無かったら・・・。たまに電気もつけず、水もガスも止めて生活してみると良いのかもしれない。我々はそんな生活をイメージし、資源を大切に使う事、地球温暖化に歯止めをかけることなどを真剣に考えなければと思う。

支援の場では、「人の目に空見えず」、この言葉を伝えながら気持ちをきちんと伝えることを親や子、夫婦に話している。

<烏合の衆>

ただ寄り集まって騒ぐだけで、統制も規律も無い群衆、又は軍勢の例え。鳥の中でもカラスの群れは、寄り集まって騒ぐだけで、統制も規律もないというところから。出典は後漢書。

世の中あちこちに「烏合の衆」がいる。人はどうも群れるのが好きなようだ。その中でも困った「衆」が、誰かの悪口を言うことで繋がっている集団である。

小学校高学年くらいから特に女子はグループ化が進む。グループに入れなかったり、グループから省かれたりして不登校になる子も多い。一人で居る強さを身に付ければなんという事は無いのだが、それは誰にでもできるものではないだろう。そして今の時代、子どもたちの間には Line というグループがあり、その中で誰かを馬鹿にしたり、貶めたりすることを面白がっていたりする。

多くの子どもたちが、時には母親までが、Line に取り込まれ、傷ついている。ツイッターや Facebook も要注意である。

相談場面で出てくるこうした話に、「そんな『烏合の衆』のなかまにならないで、一人で居る強さを持って欲しい。」と伝えている。

英語では・・・

The mob has many heads but no brains.

(群衆には頭が沢山あるが、脳みそは全くない。)

<兎も七日なぶれば噛み付く>

大人しい兎でもずっといじめていけば噛み付く。どんなに大人しい人でも、度々いじめられると、遂には怒りだすということ。

いじめられて傷ついた子が、突然切れることがある。怒りをためてためて、パンパンになった時、その子は自分を抑えられずやり過ぎてしまう。そうした子どもたちには少しずつ怒りを出した方が良く、嫌なことは嫌と、大きな声で「やめて」と言おうと伝えている。それでもだめな時は大人に話すようにと。

一方加害者にも伝えねばならない。大人しいから、何も言わないから、抵抗しないからといじめを続けていたらいつか噛み付かれる。そんな時に使えるのがこの諺である。

発達障がい系の子どもでは、何年もそのいじめの事を覚えており、恨みは消えない。面談でも40代50代の大人の人からそういう話を聞くことも多い。しかしいじめた側はすっかりそんなことを忘れている。そしてある日突然復讐される。ずっとこの機会を待っていたと。これは別にサスペンス劇場の話ではないが、一歩間違えると警察沙汰になりかねない。支援者としては、いじめられて居る子どもたちの辛い気持ちを受け止め、いじめられないようにし、そして、その後のためにしっかり心のケアをしてあげなければならない。

DV や虐待の被害者や被害児が、牙をむ

くのも同様である。危険が迫った時にしか鳴かず、穏やかで大人しいあの兎でさえも、いじめ続けられれば噛み付くことを忘れてはならない。

<牛も千里、馬も千里>

遅いか速いか、上手か下手かの違いはあっても、行きつくところは同じだということ。歩みの遅い牛でも、長い道を歩いて行けば歩みの速い馬と同じ目的地につけるということから。

子どもの発達では個人差が大きい。発達障害のある子でも発達が止まっている訳ではなく、ゆっくりと成長する。覚えが速い子も遅い子もいる。器用な子も不器用な子もいる。牛のような子も馬のような子もいるのだ。

最近子どもたちがやけに急かされてばかりいるように感じる。待ってあげることも大切なのに。授業でもタイマーをセットして「ハイ3分でやりなさい。」となる。「ピピッ」と鳴って終了。何だか人間味が無いと思うのは筆者だけであろうか？

その子の速さでゆっくりゆっくり覚えればよい事も、急かされれば急かされるほどパニックで、何もできなくなってしまおうということを支援者は知っておくべきだろう。牛の歩みで良いではないか。支援者として母親にそんな風に伝えている。

何でも速い時代であって、子育てだけは、ゆっくりやって行きたいものだ。

<氏より育ち>

血筋よりも環境の方が、人間を作る上で影響が大きく、大切だということ。

一般に良い遺伝子を願う人は多いし、家系を大事にする人も多い。進学校でスクールカウンセリングをしていると、医者の子どもや弁護士の子ども、教師の子どもが家系に潰される例を見かける。

医者の子は医者にならなければいけないのか？音楽をやりたい子もいるし、勉強が嫌いな子もいる。本人が医者になりたいと思う環境や、弁護士になりたいと思う環境があって、強制されるのでなければ頑張れるかもしれない。しかし、兄弟間の比較や、叱咤叱咤の連続であればいかに優秀であっても嫌になる。

また、世代間連鎖の問題も、血筋の問題ではなく、環境要因による。DV 家庭で育てば、常に不安定な環境が子ども的人格基盤に影響を与えることは明らかだ。だからこそ、DV 家庭で育てている子どもは被虐待児として保護の対象となるのである。暴力の無い安心安全の環境にできるだけ早く入れてあげれば、世代間連鎖に繋がらない人生を送れるだろう。次の世代に連鎖しないようにしていくことが我々支援者の務めでもある。

「氏より育ち」この諺を我々支援者が常に大事にし、子どもを取り巻く環境を早く変える事、それと並行して、子どもに虐待してしまうのではないかと不安がって元被虐待児の母親たちに伝えていこう。

英語では・・・

Birth is much, but breeding is more.

(生まれも大事だが、育ちはもっと大事である。)

<嘘から出た実>

嘘のつもりで言ったことが、結果として本当の事になってしまうこと。また、冗談が事実になること。

この諺は有名だが、最近の子どもたちは余り知らないようだ。

子どもはよく嘘をつく。特に叱られたくない時は誤魔化そうと嘘をつき、その嘘を隠すためにさらに嘘をつく。そうしているうちににっちもさっちもいかなくなる。

嘘や冗談は誰でも言うが、軽い気持ちで吐いた嘘が本当になってしまう事は時々あるだろう。それが良い事なら問題ないが、悪い事だと大変である。

悪いことを言わないようにするのが一番。例え冗談であっても言って良い事と悪い事がある。この諺を子どもたちに度々伝えている。

今回はここまで。

出典紹介

こかんじょ
後漢書 中国の正史の一つ。南朝、宋の范曄（はんよう）と西晋（せいしん）の司馬彪（しばひょう）の撰。後漢一代の歴史を記したもの。